

## 第5回平和に関する市民勉強会議事録

【日時】2007年4月8日(日)13:30～15:30

【場所】かしはら万葉ホール3階会議室

【参加者数】7名

【概要】Sさんに「昭和初期の国家革新運動」と題した問題提起の話をしていただき、その後、質問も含めて参加者全員で関連する事項について話し合った。

### 【勉強会内容】

#### [1] 問題提起

##### (1) 国家革新運動とは

- ・ 昭和維新とも言った。明治維新を模範としつつ、天皇中心にして行き詰まった腐敗状況を打破しようとした運動

##### (2) 日本の革新(維新)と欧米の革命の違い

- ・ 欧米の革命は武力により従来政権を打ち破り新たな政権を打ちたてようとするが、日本の革新(維新)は先駆者として政権を倒して後は続く人たちに任せようとする傾向が強い。欧米の革命は王朝などからの断絶を意味するが、日本の維新は(天皇制を通しての)連続性がある。

##### (3) 昭和初期の情勢

- ・ 第1次大戦後の大恐慌により特に農村が疲弊していた。この状況への政府の無力に対し国民の不満が増大していた。
- ・ 外交面でも当時の政府の姿勢を軟弱として批判する声が強まっていた。

##### (4) 国家革新の事件

- ・ 統帥権干犯と批判を受けた浜口首相が右翼青年に狙撃された事件に端を発する(1930年)
- ・ 三月事件(1931年3月): 陸軍将校、大川周明らがクーデター計画・・・未遂  
デモなどで議会を混乱に陥れて軍隊を出動させ、宇垣陸相を中心とした軍主導内閣樹立を計画
- ・ 十月事件(1931年10月): 橋本欣五郎中佐らのクーデター計画・・・事前に発覚し未遂  
政財界の要人を殺害し、荒木貞夫中将と首班とする内閣の樹立を計画
- ・ 血盟団事件(1932年2月、3月): 井上日召らによる暗殺事件  
井上準之助前蔵相、団琢磨(三井合名理事長)が暗殺される。国民からの支持があり、嘆願請求書が100万集まった。
- ・ 五・一五事件(1932年): 血盟団事件残党と軍部の40名によるクーデター事件  
犬養首相暗殺、政党政治終焉  
配布された檄文には、疲弊した国民、特に東北の農民を救えとの記述もあった。
- ・ 新兵隊事件(1933年7月): 民間ナショナリスト団体によるクーデター計画・・・直前に検挙
- ・ 二・二六事件(1936年): 陸軍青年将校約1500人によるクーデター

##### (5) 国家革新運動のイデオロギー: 天皇中心という考えは共通

- ・ 日本主義: 政治・経済・文化・社会を日本中心に考える
- ・ 国家社会主義: 国家主義と社会主義の結合
- ・ 農本自治主義: 農業を中心に衣食住と共同体の調和を図る

## [ 2 ] 質疑応答と議論

\*個人名は記入していません。以下の( )内のアルファベットが同じ発言は同じ方の発言です。

### [ 事件の背景 ]

- ( A ) 先に話のあった事件を起こした人たちの考えは同じなのか、また、何をやりたかったのかをもう少し補足して欲しい。
- ( S ) 血盟団事件と五・一五事件は農本自治主義、神兵隊事件は日本主義、二・二六事件は国家社会主義がそれぞれ背景にあった。  
天皇と国民の間にいる財閥が腐敗の元になっていると考え、その妨げを除き君民一体の挙国一致体制を作ろうとした。当時、財閥や既成政党の打倒を目指す人たちは「君側の奸」という言葉をよく使った。
- ( B ) 当時は政治家が市民の代表になっていなくて、企業グループが推していたことが背景にあったのではないか。
- ( S ) 農村出身の兵隊が多かったので、軍部が疲弊した農村の意見を反映している面があった。
- ( A ) 3つのイデオロギーは独立したものか、または3つの要素を含んでいると考えるべきものなのか
- ( S ) 基本的に3つは独立した考えだ。
- ( B ) イデオロギーの違いで分かれているというより、支持階級の違いという感じもするがどうか。
- ( S ) 陸軍、海軍の違いはある。農本自治主義は海軍に多く、国家社会主義は陸軍に多い。ただし、個々の人によりかなり異なる。
- ( S ) 戦前の革新運動に教義教典に相当するものがなく、雑多な要素が含まれている。
- ( D ) 戦後の右翼との関係はどうか。
- ( S ) 国家社会主義や農本自治主義の流れを汲んでいる人はいないと思う。日本主義が主流だ。純粹右翼は東西冷戦の影響を受けて、反共産主義になった。また、鈴木邦夫らの新右翼は三島由紀夫の影響を受けている。したがって戦前とは大きく異なっている。
- ( A ) 鈴木邦夫が右翼には「愛国」と「憂国」があると書いていた。二・二六事件などは国を憂いて権力者を倒そうとした「憂国」で、戦後の右翼は国を愛して保守と同一行動を取る「愛国」と見ると、右翼の性格を理解しやすい。
- ( D ) クーデターが成功していたらどうなっていたらどうかという興味がある。政権を取っていたら真珠湾攻撃のようなことは止めるということもあっただろうか。
- ( S ) 政権を取るより後に続くことを信じていた面が強い。
- ( B ) 血盟団事件での「一人一殺」「一殺多生」はどういう仏教から来ているのか。
- ( S ) 「一殺多生」は、一人の特権者と倒すことにより多くの往生を救済するという意味で使われた。どういう宗派かはよくわからない。ちなみに、血盟団事件を起こした井上日召は日蓮宗だ。

### [ 歴史教育 ]

- ( B ) 前にもこの会で言ったが、学校の歴史を近代史とそれ以前の歴史とに分け、別々の教科として教えるべきではないかと思っている。
- ( S ) 特に近代史は学ぶべきことが多い。最近の目に見えないファシズムという状況は戦前と少し似ている面もあるように感じる。そのような問題意識を持つことが重要だ。  
武力での解決という方法は間違っていると思うが、当時は言論の自由が制限されている時代だった。
- ( B ) 最近組織が崩れてきていて、政党支持者が減り無党派層が増えている。戦前でも財閥の下に入っていた人は恵まれ、そこに入っていない人は疎外されていたのだろう。そこで武力に訴えた。  
今、インターネットの2チャンネルの掲示板でのネット右翼のようなものがあり、意識としては近いも

のを感じる。組織に無関係な人が単純な思いをぶつけ合っている。考えを集約していける人がいないのを2チャンネルなどを見て思う。

(S) 日本はアジア解放運動のセンター的役割を果たしていた。アジアの解放に協力的な人も多く、孫文も東京で組織を作った。大川周明は戦後、インド首相のネルーから昔助けてもらったということでインドへの招待を受けている。

また、人種差別撤廃条約を大正時代に初めて提案したのは日本らしい。( \* 1919年パリ講和会議で提案) このような人間愛やアジアを助けた歴史は教えていない。

(A) アジア解放の手助けをした人がいたことは確かだ。しかし、一方で日本中心主義が邪魔をした。日本中心でのアジアという考えがあったために他国を侵略してしまった。そこに矛盾を抱えていた。

(B) 欧米の植民地を抜け出し、日本の傘下に入って日本の植民地になれという形になっていた。

(S) イデオロギーは理想を言うが、現実と理想は違ってくる。八紘一宇という考えは中身は平和の考えなのだが、実現しようとしたら違ってきてしまった。

(A) 天皇を中心にしてしまったので、日本人には良くて他の国の人には明らかにおかしい考えになった。

(S) 西洋と東洋を統一するニュートラルな存在としての天皇という考えもあった。権威と権力に分けると天皇は権威としての存在である。

(S) 神話に、天照大神が天の岩戸に隠れた時、そこから出すために八百万の神が集まって謀議をした箇所がある。これが世界に先駆けた民主主義の原点だという話もある。

(B) 神話の原型はシンプルだが、徐々に装飾されてくる。この話も徐々に神の数が増えている。日本書紀を作っていたのは国の体制が固まってきた時で、どの豪族の先祖は何々の神だというような権威付けに用いられた。したがって、神話が民主主義を示しているというより、神話の形成過程が、豪族が結集し天皇を中心とする体制ができた状況に合致しているというべきだろう。

#### [ アジア主義 ]

(C) 高校の歴史ではこのあたりのことを「軍部の独走」として学んだ。二・二六事件後、統制派が主導権を握ったが、皇道派が主導権を握っていたとしてもその後の歴史はあまり変わらなかったのではないかと思うが、どうか。

(S) 南進論・北進論は変わっていたかもしれない。

( \* 南進論 = 東南アジア方面への進出を主張。北進論 = 朝鮮・満州方面への進出を主張 )

欧米による植民地化からのアジアの解放を目指すアジア主義という考えがあったが、日本は満州事変から道を誤ったと思う。石原莞爾らが満州国を建国したが、東條らによって五族協和という理念から流れが変わって行ってしまった。

(C) クーデターを企てた側はアジア主義に基づいていたのか。

(S) アジア主義より、先に国内の団結を目指していた。

(C) そのころは脱亜論の考えはもうなかったのか。

(A) 中国などのアジアを見下すという意味での脱亜論は続いていて、アジアの人々に国を作る力がないので日本が作ろうという考えに立っていたようだ。

石原莞爾は満州事変を起こした後、中国人でも国を作れるというふうに変えて転向した。しかし、転向後は主流派にはなれなかった。

(S) 石原莞爾は日本とアメリカが残ってきて世界最終戦争を戦うという考えを持っていた。しかし、戦後は一転して反戦平和を唱えるようになった。

(A) 日米が世界最終戦争を戦うという考えの根拠は何だろう。現在から見ると、状況を見てそう判断しただけのように思える。

- ( D ) 革新を言う人たちの間に、北進派、南進派というはっきりした区別はあったのか。
- ( S ) 分かれていた。赤尾敏はソ連と戦うことを主張しており、東條英機に反発していた。
- ( E ) 明治の征韓論と、昭和にアジアを攻めようとしたのとどう違うのか。また、なぜ、アジアを侵略しようとしたのか。
- ( S ) 欧米からのアジアの解放を大義名分としていた。
- ( E ) 日本がアジアで一番で、中国や韓国を見下していたという考えが根底にあった。
- ( S ) 軍部ら支配者層はそういう考えだったが、純粋な青年将校はアジアの解放を考えていた。朝鮮の義勇軍に参加した人もいて、民間人に侵略の意思はなかったと思う。
- ( E ) 天皇中心の政治を目指すといっても、天皇を奪い合って利用している状況に思える。考えとしては非常に幼稚だ。二・二六事件でも一部の人が加わっただけで、天皇に否定されて終わってしまった。考えがあまりに狭いから、アメリカのような民衆がいろいろな考えを持つ国に負けたんだと思う。
- ( B ) 民衆の思いを代弁しているつもりでも、民衆を味方につける行動を伴っていないので上滑りしている。阿川弘之の本に次のように書かれていた。海軍はイギリスを手本にし、陸軍はドイツを手本にした。それが留学先や思想に反映された。東條英機が首相になるなど陸軍が中心になっていったことで、アメリカとの戦争に進むことになった。海軍派が勢力を持っていたら、ソ連に向かっていったらう。

[ 事件後 ]

- ( A ) レジメのタイトルに「国家革新の幕開け」とあり、1931年から36年までで終わっているが、その後は大きな動きはなかったのか。
- ( S ) テロ事件は散発したが、大政翼賛会に集約されていった。
- ( A ) 1936年以降に日中戦争が本格化しアメリカとの戦争も始まり日本の状況としては1936年より悪化していったと思うが、なぜ、その時にこそ、革新運動が起こらなかったのだろうか。規制が強化されたのは確かだろうが、なぜ、集約されてしまったのか。  
三月事件や十月事件で処罰が軽かったため、血盟団事件などは、そういう状況に乗じてやっただけの事件ではないかという疑問を持つ。
- ( B ) 後に続くことを信じてやったが、続く人がいなかった。
- ( S ) 特攻隊でも後に続くことを信じて、と言っていた。
- ( E ) 特攻隊は軍部が命令したもので、実際には行きたくなかったと思う。だから、後に続けとは遺書には書いていないのではないか。
- ( B ) 同一民族の感覚があるので民族内の内輪もめに終わり、多民族国家のような断絶が起こらない。
- ( E ) 日本は国の中では宗教・人種で排斥しない。同じ国民同士という考えがある。
- ( D ) 大川周明や北一輝は当時の支配者層に利用されただけのようにも感じる。五族協和を唱えたアジア主義の人も欧州の植民地を奪った後に自ら独立させようとしなかったことは結果的に誤りであったと考えざるをえない。今回の話を聴いて、最後まで戦争に反対していた石橋湛山などを勉強し直したいと思った。

以 上

次回予定

【日時】2007年6月10日(日)13:30~15:30

【場所】かしはら万葉ホール3階会議室